

《年 表》

二宮尊徳 二宮家 御仕法関係 ほか



二宮尊徳生家と回村の像（小田原市）
～ 神奈川県重要文化財指定 ～

年号	安永元	天明3	天明4
西暦	1772	1783	1784
二宮尊徳・二宮家 関係			
相馬中村藩 関係			
	草野正辰誕生	天明の飢饉（～天明六年）	藩 幕府から五千両借り入れ

天明 7	寛政 3	寛政 8	寛政 12	享和 2	文化元	文化 3	文化 7	文化 9	文化 10	文化 11	文化 13	文化 14	文政元	
1 7 8 7	1 7 9 1	1 7 9 6	1 8 0 0	1 8 0 2	1 8 0 4	1 8 0 6	1 8 1 0	1 8 1 2	1 8 1 3	1 8 1 4	1 8 1 6	1 8 1 7	1 8 1 8	
金次郎 相模国足柄郡栢山村に生まれる			金次郎（十三歳）父利右衛門死去	酒匂川氾濫し田畑流出、一家離散 金次郎（十五歳）母・よし死去		金次郎（十九歳） 生家に戻り自家の再興を始める	金次郎（二十三才）自家の復興完了	金次郎（二十五歳） 小田原藩家老服部家に奉公し勉学に励む					金次郎（三十一歳） 服部家たて直しの仕法を始める	
	池田胤直誕生	相馬益胤誕生			藩財政窮乏、藩の借金二十万両を超える		一向宗門徒農民が来住を始める（真宗移民開始）		相馬益胤第十一代藩主となる（十七歳）	熊川胤隆誕生	富田高慶誕生	藩の借金三十万両に達する	慈隆誕生	草野正辰勘定奉行拜命（四十五歳） 厳しい儉約令「文化の御厳法」実施

文政2	文政4	文政5	文政6	文政7	文政9	天保2	天保5	天保6	天保9	天保10	天保11
1819	1821	1822	1823	1824	1826	1831	1834	1835	1838	1839	1840
	長男・尊行誕生 金次郎（三十四歳）服部家の仕法完了	桜町領の仕法を命ぜられる 小田原藩から武士に取り立てられ下野国 金次郎（三十五歳）	金次郎一家桜町に移住し桜町仕法を開始	金次郎（三十七歳）長女・文（文子）誕生		「報徳」というようになる き、以後、尊徳の考え方や仕事の仕方を 徳報徳”だ”とのお褒めの言葉をいただ 小田原藩主より「汝の仕事は論語の”以 金次郎（四十四歳）桜町仕法第一期完了			金次郎（五十一歳）小田原藩仕法発業		
池田胤直家老職郡代頭拜命（二十八歳） 斎藤高行誕生 相馬充胤誕生					荒至重誕生	草野正辰江戸家老職拜命（五十九歳） 天保の飢饉（〜天保七年）	儉約厳法令十ヶ年延長	相馬充胤第十二代藩主となる（十六歳）		富田高慶 二宮金次郎に入門（二十五歳）	荒至重 城内の和算家・佐藤儀右衛門に師事（十四歳）

天保12	天保13	天保14	弘化元	弘化2	弘化4	嘉永3	嘉永4	嘉永5
1841	1842	1843	1844	1845	1847	1850	1851	1852
提出を申し渡す 富田高慶を通じて藩の分度に関する資料の 相馬中村藩の要請に対して金次郎面会せず	名を尊徳と名乗るようになる 金次郎（五十五歳）幕府に登用される	尊徳（五十八歳）日光仕法のひな形作成幕命						
相馬中村藩 金次郎に仕法を要請	相馬中村藩の仕法を許される 国家老池田胤直（五十一歳）上京し尊徳と会談 江戸家老草野正辰（七十歳）小田原藩江戸邸で尊徳と会談	藩の分度（長期財政基本計画書）決定	相馬益胤死去（四十九歳）	藩主充胤 尊徳に面会し仕法を依頼（二十六歳） 齋藤高行 尊徳に入門（二十六歳） 高慶が尊徳の代理として仕法のため藩に戻る（三十一歳）	報徳仕法が成田村・坪田村で発業（御仕法の始まり） 熊川胤隆 郡代家老職拜命（三十三歳）	荒至重 尊徳に入門（二十四歳） 富田高慶『報徳論』脱稿（三十六歳） 荒至重 江戸へ出て修学（二十一歳） 草野正辰死去（七十五歳）	反町に仕法役所建設	富田高慶（三十八歳）尊徳の長女文（二十八歳）と結婚 入植者のため宗兵衛堤外を富沢地内に新築（安政四年）

嘉永6	安政元	安政2	安政3	安政4	文久元	慶応2	慶応3	慶応4	明治3	明治4	明治5
1853	1854	1855	1856	1857	1861	1866	1867	1868	1870	1871	1872
		尊徳の孫・尊親誕生 尊徳（六十八歳）今市仕法役所に移転	尊徳 今市で死去（六十九歳）	尊徳の子尊行 仕法を継承（三十六歳）				戊辰戦争を避けるため二宮一家相馬中村へ移住	二宮家 藩が用意した石神村の家へ移住	尊行死去（五十一歳）	
文 出産のために帰った実家で死去（二十九歳）	斎藤高行『報徳外記』著わす（三十五歳）	池田胤直死去（六十四歳）	荒至重 御仕法掛代官次席を拝命（二十九歳）	日光の僧慈隆（四十一歳）藩の顧問として招へい 富田高慶『報徳記』を著わす（四十二歳）	愛宕山に尊徳の遺髪を葬った墓を建てる	荒至重 藩領内随一の唐神堤の改修工事完成	荒至重 北郷代官を拝命（三十一歳）	中村川原町に新仕法役所完成	愛宕山に尊徳墓の拝殿として地蔵堂を建立	虻沢堤完成	愛宕山に尊徳墓の拝殿として地蔵堂を建立
											熊川胤隆死去（五十四歳）
											荒至重（四十一歳）南右田堀完成させる
											慈隆死去（五十七歳）
											富田高慶（五十八歳）西郷隆盛に仕法の継続と支援を要請
											富田高慶（五十六歳）二宮家のお世話のため東隣りに移住
											御仕法廃止（発業から二十七年で幕）新政府に結果報告

明治10	1877		「興復社」が設立され、初代社長に高慶（六十三歳）・副社長に尊親（二十二歳）が就任
明治13	1880		元藩主充胤（六十一歳）「報徳記」を明治天皇に献上
明治14	1881	明治天皇	東北巡幸の際、高慶（六十七歳）に引見
明治16	1883		「報徳記」宮内省版を刊行し知事職以上に配付する
明治18	1885		「報徳記」農商務省版を刊行
明治20	1887	相馬充胤死去（六十八歳）	
明治23	1890	富田高慶死去（七十六歳）	
明治24	1891		「報徳記」一般向けに大日本農会版を刊行
明治26	1893		文豪・幸田露伴 少年少女向けの伝記『二宮尊徳翁』を出版 薪を背負った金次郎が挿絵で登場
明治27	1894	齋藤高行死去（七十五歳）	
明治30	1897		京都画壇の画家・幸野楳嶺が描いた薪を背負った金次郎の絵『二宮尊徳幼時図』がシカゴ万博に出品
明治31	1898		尊親（四十二歳） 北海道へ移住し十勝国の開拓開始
明治37	1904		今市に尊徳を祭神とする報徳二宮神社が建てられ、尊行と富田高慶も配祀される
明治40	1907		国定「尋常小学修身書」に尊徳が取り上げられる
明治41	1908		尊親（五十三歳） 北海道開拓から中村へ戻る 全集の編集にあたる（大正3年） 中村城御三の丸跡の相馬事務所で『報徳』

	明治 42	明治 44	大正 6	大正 10	大正 11	大正 13	昭和 3	昭和 21	昭和 24	昭和 51	昭和 63	平成 9	平成 12	平成 18	
	1 9 0 9	1 9 1 1	1 9 1 7	1 9 2 1	1 9 2 2	1 9 2 4	1 9 2 8	1 9 4 6	1 9 4 9	1 9 7 6	1 9 8 8	1 9 9 7	2 0 0 0	2 0 0 6	
宗教家・評論家の内村鑑三の英文著書「代表的日本人」で尊徳を農民聖人と取り上げ英語文化圏に紹介	荒至重死去（八十三歳）		所）の園長に就任 福島の立薫陶園（今の愛育園のある場 尊親（六十二歳）	尊親死去（六十七歳）		各地にあった報徳社が大同団結し「大日本報徳社」が結成される	その後、全国各地の学校に金次郎像が建つようになる 昭和天皇即位御大礼記念名古屋博覧会に薪を背負った金次郎の石像が出品されたことがきっかけで	尊徳の肖像画を図柄にした一円札（一円券）が日本銀行から発行される	G H Qが尊徳を「日本が生んだ最大の民主主義者」と賞賛する	制定した『市民憲章』に報徳の訓えを謳う		第一回報徳サミットが小田原市で開催される	第二回報徳サミットが掛川市で開催されて以降、毎年開催されるようになる	第五回報徳サミットが相馬市で開催される （2月19日／相馬市民会館）	尊徳先生一五〇回遠忌墓前際（10月20日） 愛宕山地蔵堂と墓前で
	荒至重死去（八十三歳）			荒至重の功績を称え至重を祭神とする南右田神社建てられる											